
けいおん! 僕の奏でる音

icbb

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 僕の奏でる音

【ZPDF】

Z8594Z

【作者名】

icbb

【あらすじ】

初めての執筆です。生暖かい目でみてやってください

けいおんの一次小説です

初めての執筆で悪い文章ですが、意見、感想のほどよろしくお願ひします

なるべく頻繁に更新をしていくつもりなので、よろしくお願ひします

主人公、天城空也。共学になつた桜ヶ丘高校に入学することになり、唯たちとは同級生。澪や律とは中学からの知り合いであり、小さい時からギターを弾いていた。実力はプロになる一歩手前

主人公の幼馴染、不動大地。空也と共に桜ヶ丘高校に入学した幼馴染、空也からは煙たがられてはいるが空也も信頼する親友。もちろん澪や律とも知り合いである

以上がオリキャラの簡単なプロフィールです。完全見切り発車です
のでご了承を

第零話（後書き）

次の話より本編です

四月某日

「こんな感じか？」

桜ヶ丘高校の制服であるフレサーに袖を通し姿見で確認する

「まあ……そのうち貰えるだろ」

自己完結し、俺の部屋から出た

ପାତ୍ରାବ୍ଦୀ

母さんが笑顔で出迎え 働きの前は朝食をおさ
めの顔を俺は向けてきた

あんた 何か語活するの?」

- 108 -

曖昧な返事をし朝食を食べ、鞄を担いだ

「おへんじ、いじ、まじ」

言葉少なめに家を出た。しばらく歩いていると後方から面倒な存在がやって来た

「おーーーーう、元氣か？空也ーー！」

「お前が来なきや元氣だ…」

大地に暴言を浴びせ、無言で歩みを進める

「お前は毎回ひどいな…」

大地はそう言いながらもしつかりついてきた。そして学校に近づくにつれて桜ヶ丘高校の生徒が多くなつていった

「女子ばっかりだ…」

「黙れ」

大地の腹部にパンチをいれ氣絶させクラス表を見にいつた

天城空也。平沢唯。不動大地。真鍋和。

「何であいつと一緒なんだよ…」

ため息をついて教室に向かつた。

入学式を終え、一人一人自己紹介をしていく

「天城空也です。よろしく…」

簡単に自己紹介を終わらせ、部活の勧誘チラシがある掲示板に向か
った

「うーん……めぼしい部活はねえ……か……

踵を返し教室に戻つて返す支度をしていると大地がやつてきた

「空也ー帰ろ!うぜー

「…………

それを無視し昇降口に歩いていったそこに燐と律がいた

「あー空也ー

「ホントだ。クウじやん

俺を呼び捨てで呼ぶのは秋山燐、クウとあだ名で呼ぶのは田井中律。二人とも俺の中学からの友達である

「よう、一人とも。今帰りか?」

「ああ、空也も?」

燐の言葉に俺は小さく頷いた

「じゃあ一緒に帰ろ!うぜー

律の言葉に頷いたのは俺ではなく大地だった

「俺も一緒に帰るーー…………ぐはー!」

大地の腹部に蹴りをいれ俺は歩き出した

「空也と不動は高校に行つても相変わらずだな……」

澪が呟き俺に着いてきた

「澪はどうなんだ？」

「ん？ 何が？」

「人見知り……俺と大地以外の男と喋れる様になれそうか？」

澪は少しあせつた表情を見せた

「まだ厳しそうだな、頑張れ」

「うん……やつぱぱつ空也こは分かつちやうか……」

澪は苦笑いを浮かべた。それから談笑しながら帰路についた

第一話

桜ヶ丘高校に入学して2週間がたつた

「空也ーー、お前部活何に入るんだ?」

購買から帰ってきた大地が言つてきた

「まだ何も決めてねえよ」

俺の言葉に大地が驚いていた

「なんだとーーお前..和ちゃんが言つてたぞ。部活をしない奴はーー
トだつてーー!」

「また極端だな。そうこうお前は?」

「俺か?俺はテニース部だ」

「お前如きがテニースだと?」

「酷い言われようだな。ちゃんとした理由があるのだよー!」

大地は意氣揚々と立ち上がった

「こ」の学校は元々女子高ーつまり..「言ひてえ事は分かつたと
りあえず黙れ」ヒドッ!」

大地の言葉を遮り、昼食を手早く済ませた

「そういやお前… 軽音部入らねえの?」

「軽音部?」

「ああ。さつき張り紙が有つたぞ?興味があるなら行ってみるよ

「そうだな…」

言葉少なげに頷き、午後の授業が始まるまで軽音部について考えて
いた

その日の放課後…

「こ」の先ね…」

山中教諭に部室の場所を聞き、音楽準備室に向かうが一人の少女を
発見した

「平沢……だっけ? 何してんの?」こんなところで?」

「え? と……誰でしたっけ?」

少女は頭をかきながら聞いてきた

「天城空也。一応お前と同じクラスだ」

「そうだった。空也だからクーくんだね!」

「好きに呼べ。んで? 何してんの?」

「あーークーくん一緒に音楽室に来てー！」

「何で？」

話を聞くと軽音部に入部したようだが、バンドを組んでもギターができないと理由でやめたいとの事だった

「えじや…何ならできるんだ？」

「えっと…カスタネット？」

俺の中で想像しているととても似合っていた

「はあ…まあいい、行くぞ」

俺は平沢を連れて音楽準備室に向かった

「へーん」

音楽準備室につくと平沢はドアを開くの躊躇つていた

「ま、早々入れよ。入部断るんだろ？」

「へ、うん…でも…」

まだ入るのを躊躇つっていた

「はー…」

俺は平沢の前に立ち、変わりに音楽準備室のドアを開けた

「うーあれ？ 鶴と律じゃん」

そこには鶴と律、そして初対面の女子がティータイムをしていた

「空也？ 何でこんなところに？」

「俺は軽音部員を連れてきただけだ」

俺は背中にいた平沢を前に押し出した

「貴方が平沢唯さん？」

「は、はい！」

「入部希望の？」

「は、はい！」

律と鶴が平沢を質問攻めにする

「ありがとー！ ギターがすっごく上手いんだよねー平沢さんみたい
な人に入つてもらつて心強いやー！」

律が平沢の両手をつかんでブンブン振つていた

「尾ひれが付いちやつてんな…どうする気だ？」

みんなに聞かれない程度に呟いた

「平沢さんはどんな音楽がやりたいの？好きなバンドは？好きなギタリストは？」

律が質問で攻め立てる

「じ…じ…」

澪がじから始まるギタリストを上げていき遂に平沢は黙ってしまう。実は入部を辞めさせてくださいを言いたいだけなのに…仕方ない…

「澪も律も落ち着け、平沢がお前らに話したいことがあるから来たんだ」

「え？」

澪と律、それにムギと呼ばれた少女も一斉に平沢を見た

「ほり、頑張れ」

平沢の背中をポンと押した

「クーくん…あの、実は入部を辞めさせてください…」

平沢の言葉に三人が固まった

「ギターは弾けないし、もつと違う楽器をやるんだと思つて…」

「じゃあ何ならできるの？」

「カスタ……ハーモニカ！」

見栄を張つたのが間違いだつた

「あ、それなら持つてるよ！吹いてみて」

律が持つていたのだつた

「『めんなさい！吹けません！』

凄い速さで平沢が謝罪した

「でも、入部しようとしたことは音楽に興味があるんだよね？」

澪のフオローを皮切りに三人がなんとか入部させようと頑張ついた。お菓子で餌付けしてみたり、他に入りたい部活がないならと誘つてみたり、すると平沢は申し訳なさそうに泣いてしまつた

「『めんなさい、軽い気持ちで入部するなんて言つてしまつたばっかりに…』

こうなつてしまつたら平沢を留めらるるためには…

「澪…ちょっと…」

小声で澪を呼んだ

「お前ら演奏できるの？」

「え？ あ、 ああ簡単なものなら…」

「なら聞かせてやれ。 ああなつた以上留まらせるためには演奏だ。
それで駄目ならしかたねえ」

「わかった」

澪は頷き三人を集めた

「平沢」

「グスツ… クーくん？」

「皆が演奏してくれるってよ。 それ聞いてからでも本当に入部しね
えつて事決めても遅くねえんじゃねえか？」

「演奏… してくれるので？」

平沢が三人を見ると全員が頷いた。 平沢は泣き止み長椅子に腰を下
ろした。 僕は壁に背中を預けた

「ワン・ツー・スリー・フォー…」

翼をくださいのカバーした曲を演奏した三人、 とてもじゃないが上
手いと言えないがそれでも充分平沢の心に響いているのを確認でき
た。 そしてそれは僕にも響いた

パチパチパチ

平沢から拍手が起こり席を立つた

「なんていうか…凄く言葉にしていいですか…」

律が期待をこめた眼差しを平沢に向けたが

「あんまり上手くないですな…」

バツサリと切られた

「でも…なんだかすっごく楽しそうでした！私…この部に入部します！」

その言葉を聴いた澪と律はお互の頬を抓つて夢じゃない事を確認すると律はその場で万歳し澪はこいつにやつてきた

「ありがとなー空也のおかげで廃部にならなそつだー！」

「よかつたな…」

俺は澪の頭をポンポンと叩いた

「あ、ああ…それでなんだが…空也も入部しないか？」

澪が顔を赤らめながら提案してきた。そんなもの最初から答えは決まっていた

「ああ、てか俺は最初から入部するつもりだったよ。それに…」

「それに…何だ？」

「澪からの頼みを俺が聞かない訳は無いからな

その言葉を聞いた澪はさらに顔が赤くなつた

「お熱いねえ、お二人さん。まあ今はいいや。記念写真撮り一ぱり澪もクウも！」

律が手招きして呼んでいた

「行くか」

「ああ」

ふたりは並んで歩き出した

第一話（後書き）

アニメ第一話です

オリジナルの部分も有りますがご了承ください

俺が軽音部に入部して翌日…

「うーん…」

俺は自室にあるエレキとアコギを見比べていた

「エレキでいいか…」

エレキギターを左肩に担ぎ自室をでた

「ん? 何だお前? ギターなんて持つて

「使つかから持つてんだよ」

親父が興味なさ下に新聞を読みながら聞いてきた

「近くの秋山さん所の娘さんと同じ部活に入ったんですけど

母さんが朝食を運びながら親父に付け足した

「お前ら、小さい時から…お前…もしかして…うるせえ…」「ぐあ…」

親父のボディにパンチをぶつけ朝食を食べた

「あ…一生に一度の高校生活だ…後悔するなよ…」

「わかつてゐる…」

朝食を食べ終わるとギターを担いで家を出た

「あ、おはよう空也」

家の前に澪が待っていた

「何でいるんだ？」

「同じ部活に入ったんだ。一緒に登校してもいいだろ？」

「好きにじるよ。とにかく一刻も早くここから立ち去りてえ」

俺は自宅の窓を指差した、そこには親父と母さんが覗き覗をしていた

「や、そうだな……」

俺が歩を進めると澪はそれについてきた

「わ、いや、律はびうしたんだよ？」

「律は寝坊したから……」

澪は俺に携帯を見せそこには……『寝坊したから先にいって』と書いてあった

「ていうか、空也。ギター持つてたんだな……」

「ああ。お前は俺んちに入ることが無かつたからな。大地とかなら知つてたぞ

「へえ… 空也のギター聞いてみたいな」

「放課後に見せてやるよ」

雑談を繰り返しつつ桜校の校門までついた

一 空也、ギターを置きにいこう

澪が音楽準備室の鍵を見世、軽く頷いた

一
じやあ
放課後でな

「ああ」

澪と別れ、それぞれ自分の教室に向かった。教室に入ると大地が飛びついてきた

「……………アベリーハー！」

大地の腹部にパンチを浴びせ教室に入る

「新モード.. おせむ」

「ん？ ああ真鍋か… おせよ！」

真鍋が近寄つてきた

「大地君ほつといていいの？」

「俺の知ったことではない。そのまま永遠の眠りについてほしぐらいいだ」

そういうながら俺は席に着くと真鍋がそれに着いてきた

「空也君、唯の事ありがとね」

「唯？ ああ平沢のことか」

「うん、あの子高校に入つて何か部活したいって言つてたから」

それを言ひ真鍋はまるで保護者の顔だった

「空也君なら何か安心できそつなんだ、唯の事よろしくね。後、和でいいよ」

そういうと満足したかのように真鍋…もとい和わ自分の席に着くとすげに担任がやつてきた

昼休み…

「やつこや空也、今朝澪ちゃんと一緒だつたな」

「何で知つてんだ？」

「見たから」

「つざわくべ」

「つづせーお前にもてない男の気持ちが分かつてたまるかー。」

「お前のがうるせえ。つーかどつかいけ」

「空也の……バカー……！」

大地が泣きながら廊下に飛び出していった。これで静かに昼食が食べられるな。それから午後の授業は寝てしまふ

放課後：

「クーくんー一緒に部活にいこーー！」

平沢が満面の笑みで近寄ってきた

「ああ

特に拒否する理由も無いので一緒に音楽準備室に向かった

「こないだねー」

「……」

平沢が元気よく挨拶するとすでに来ていた澪、律、琴吹がそれぞれ挨拶をした

「まさかクウがギターやつてたとはなー」

律が俺のギターケースを見ながら言った

「えーーークーくんギター弾けるのー！」

「誰が初めてつったよ……よつと…」

ギターのストラップを肩にかけアンプをつなげる

（ ）

軽くストロークすると次はこの前三人が弾いていた翼をくださいをロツク調に弾いた

「ま、軽くこんなもんだろ」

四人を見ると表情が固まっていた

「どうした？」

俺は首を傾げた。静寂を破ったのは澪だった

「す、」「…」

「ああ…」

澪と律が目をキラキラさせていた

「俺のことはどうでもいいが、琴吹、茶が零れてるぞ」

「え？ ああっ！」

今それに気づいたようで慌てていた

「やついえば、なんで澪ちゃんはギターじゃないの？」

平沢がふいに澪に聞いた

「ギターは……その……恥ずかしい……」

「恥ずかしい？」

「ギターはバンドの中心で自然と観客の目も集まるだろ？それを想像しただけで……もう……」「……」

ボフン！

澪の頭から爆発音がして澪は机に伏せた

「澪は恥ずかしがり屋だからな。まあギターはイケメンのクウだけどな～」

「俺はイケメンでは無いだろ」

「その顔で何を仰るのかな？クウがイケメンじゃなかつたら大地はどうなるんだよ」

「そうですよ。空也君はカッコいいと思います。」

琴吹がおつとりとした表情で告げた

「もうなんでもいいが、ギターは俺と平沢で、ベースが澪、キーボードが琴吹、ドラムが律だな？」

「つつかんせドリムって感じだね」

平沢の言葉に律が反応した

「私にだつて深い理由があるんだよ！」

「理由? どんな?」

平沢が田をキラキラさせながら律に聞いていた

「それは……その一ヵツ古いから」

「えー、そうなの?」

「だって、ギターとかキーボードとか手でチマチマして、イーーーってなるんだよ」

律が全身で表現していた

「私小さこじろからピアノを弾いてたの。」コンクールで賞も貰つたのよ」

「（なんでそんなやつが軽音部にこねんだ？）」

俺の思いをよそに復活した澪が声を発した

「平沢さんはも「ギタ「誰でにこみ「え?」」

「私もう澤ひやせんの」とを澤ひやんって呼んでるし、あークーくんも唯てよこでー。」

「じ、じ、じ、あ、ゆ、唯…

澤が平沢に向かつて上田遣いで唯つて呼ぶと。丞先が俺に向いた

「じやあクーくんもー。」

「唯、もう二からギターはもう置つたのか?」

あつさり唯とこうと唯は不満げな顔をして、なぜか澤も同じような顔をしていたが見なかつたことによつて、

「空也君!私も私もー。」

「わかつたよ。紬でいいんだろ?」

「はーー。」

何がそんなに嬉しいのか分からんが紬は「ハハハ」と笑つた

「ギターって値段じれぐらーするの?」

「安いのなら一万円べらりこからあるが…

「安くても駄目だ、やうだな五万円べらりのを買えばーこみー

俺と澤がギターの値段について説明する

「じゃあクーベルは、どうぞしたの？」

「俺のは八万ぐれーだった中学の二年間必死で小遣いを貯金してたからな」

「そんなこするのーあのーりつちゃん…」

唯が笑顔で律に向いた

「部費で落ちませんかね？」

「おひめさん…」

唯がバツサリ切られ、元気をなくした唯に紬がお菓子で元気付けていた

「じゃあさ、今度の休みに部費で楽器見に行かせやー」「とにかくだ、誰に楽器が無い」とは始まりんぞ

律の提案に唯は頷いた

「俺もか？」

「当たり前だ。紬が居なきゃ詳しいこと分からぬしな」

「やつですか…」

行くしかないよつだつたそして週末…

「行くぞー空也ー！」

俺がエスケープしないように澪が迎えに来た

「はいはい」

一人で待ち合わせ場所の商店街に向かっていった。商店街に行くと律と紬がすでに待っていた

「見せ付けますなあ、美男美女のカップルは

「ヤニヤしながら寄つてきた

「り、律ー名に言つてんだー！」

「ヤニヤする律と慌てる澪の漫才を見ると唯がやつてきたが、人にぶつかり、犬を可愛がりに行つたりとなかなかたどり着けないでいた

「お金は大丈夫だったの？」

女子が一、三歩前を歩き、俺が後ろから付いていくと唯がふいに立ち止まつた

「今なら買えるー！」

ブティックのショーウィンドーに目を光らせていた

「楽器買つんだろー？」

律が連れ戻そつとすると、唯が店の中へ入つていった

「澪、俺その辺の本屋に居るから帰つてきたら呼んでくれ」

「わかつた…」

女子四人はブティックの中に姿を消していった。俺は本屋の音楽雑誌を読み漁り、しばらくすると澪が迎えに来た

「！」めん、待たせた

「想定内だ」

読みたい雑誌を一通り読んだところで楽器屋に行くかと思えば喫茶店に入つていった

「楽しかったねー」

だの

「へへー買つちつた」

だの唯と律は思い思ひの事を口にした

「次はどうにこいつか？」

「ここにはそんなことを言つ出した

「樂器だ樂器…」

俺と澪は口を揃えて言つた

そんなこんなでやつとこを楽器店『10GHA』に着いた。こな品揃えがよく俺も頻繁に来ている場所である

「ギターがいつぱいだねー」

唯が感想を口にすると同時に俺は単独行動で自分が欲しい弦の換えやらその他諸々を物色し、唯に合ひそうなギターを探していると

「これいいんじゃね？」

価格が四万八千のネックが細めのギターを発見し、澪たちに合流した

「あつちにお前に合ひそつたギターが合ひたんだが…それがいいのか？」

唯はあるギターに夢中だった

「止めはしないが払えるのか？そんな額？」

値段を見ると一十五万と書かれていた

「うーん… わすがに手が出ないなあ…」

と言いつつも視線は離れなかつた

「私もあのベースを買ひとき相当悩んだからなあ

「あたしもあのドラムを買ひとき値切りまくつたしなあ

「店員さん泣いてたがな」

澪、律、俺がそれぞれ口にした

「あの、一億切るって？」

「欲しいものを安く手に入れるために努力と根性で安くさせたんだ」

紹の質問に律が白懸けに答えた

す」「い！なんか憧れます！」

「憧れる駿馬かとにかく!?

そんなやり取りをしても、唯に井戸へかみ田を離さなかつた

はるはるにさかづきのうきを買ひたまに

律が言し出した

「これも軽音部の活動だよー。」

「私やりたいです！」

律と紬が賛成し、最も嬉しそうな表情だった

「バイトか…」

澪は不安そうな顔で呟いたのを俺は見逃さなかつた。その日の帰り道

「 ～ ～ 」

律が先行し、俺と澪が並んで歩いていた

「大丈夫か？」

「何がだ？」

「バイ

「不安はあるけど。唯の為、軽音部のためって思えるとでもあると澪

「

「せうか

俺は軽く笑うと逆に澪から話しかけられた

「空也も…ありがとうございます。心配してくれて

澪が俺に向かって笑った。その顔を見て俺は顔を背け

「澪とは長い付き合いだし…な

そっぽを向いて喋るしかなかつた

翌日の放課後…

「どのバイトがいいかなあ

全員でバイト探しをしていた

「ティッシュ配るのは?」

「無理…」

「ファーストフードの店員は?」

「駄目かも…」

律と紬の意見をことじとへ澪が却下していた

「澪にはハードルが高いかもなー」

律がフォローするとまた悪いことを考えたのか澪は頭から蒸気を発して机に伏せてしまった

「やれやれ…」

求人雑誌に田を通していると澪でもできそつなのを発見した

「これなら澪にもできんじゃね?」

机に広げて俺が指差したのは道路交通調査の求人だった。これは比較的に人と関わり無くできるもので澪にも適していた

「車の台数や通行人の量を調べるんだよ。カウンターをもつてな。どうだ?」

それならと澪は頷き、週末の一日間は交通量調査のバイトが決まった

週末…

「…………」

力チ、力チ、力チ

カウンターを押す音だけが俺たちの中で響いている

このバイトは総勢八人で行い女子四人、男子四人で別々の場所で調査している。俺の他には大学生と見られる明らかにがり勉の男三人で話すことが何も無い、よつて無言でカウンターを押している。向こうは俺を不良だと思っているらしく、ビクビクしている

「（やりにくいつたらねえな）」

仕方なしに鞄から音楽機器を取り出しイヤホンをつけ音楽を聴きながらカウンターを押していく

そんな感じのバイトが一日続き一日目の夕方

「「「お疲れ様でした」」」

バイト代を貰い頭を下げる一日八千円で一日で一万六千それが五人で八万、当初の五万を足してもまだ足りない

「分かりきつた事だつたが、まだ足りねえな」

「そうだな、後何回かバイトするか」

「また探そうぜ」

俺、澪、律がそれぞれ口にすると唯が口を開いた

「私、やつぱりいいよ、このバイト代は誰それで使って。私は
クーくんの薦めてくれたギターを賣つよ、私、早く練習して誰と一
緒に演奏したい、だからまた楽器店に行くのつまつて」

唯がそう言つたら俺たちは頷くしかない。バイト代を返却され唯は
帰つていった

それから数日後俺たちは『10GIA』にいた

「いやしだ

「よし、またバイトするか

澪と律が意氣込んでいたが紺が何かを閃いたようだった。なんとな
く察しつづがな

紺がカウンターから帰つてみるとあのギターを五万で売つてくれる
とのことだった

「このお店のうちの系列なの

「えー、」

紺の言葉に澪と律が固まつた

「やつぱり琴吹財閥の娘さんだつたか…」

「はい、天城グループの息子さん」

同じ調子で返してきやがつた。秘密にしていたのにな…

「「ええ…」」

澪と律はなお固まつた

「空也、それ本当なのか?…」

「まあな、俺たち直接会つた」ことは無かつたが財閥の跡取りだ

「クウの家普通の家じやん…」

「贅沢する必要が無かつたからな」

そんな中何も知らない唯がギターを買って帰つてきた

「ただいま～皆何してゐの?」

「何もしてねえよ。まあ帰るだ

俺は踵を返して家路についた

翌日…

「ふんすー。」

唯がギターを持つて胸を張っていた

「ギターを持つと様になるな

「何か弾いてみて」

澪と律がそれぞれ口にする

「うーん…」

唯が弾いたのはなぜか ルメラだった

「まだ練習してないのか？」

「ギターってなんかキラキラピカピカしてて触るの怖くって

「弾けよ」

「まだフィルムも外してねえしな」

それを見た律は一気に唯のギターのフィルムに手を掛けはがしてしまったショックを受けた唯に紬がお菓子で期限を取り戻させた

「どうやつたらライブみたいな音が出るのかなあ……」

「アンプに繋げればできるよ」

律が唯のギターをアンプにつなげ唯がギターをストロークする

「いいからやつとまじまる…」

「軽音部が…田標はでつかく卒業までに武道館…」

「それは無理だ」

俺の突っ込みに律はぶつぶつ言つていたが無視した

「やっぱ私にはまだはやいねー」

唯はアンプのコードを抜くとした俺はその瞬間鞄からイヤホンを
だしてノイズ セリングを起動した

とたんに爆音が流れ俺を除く四人が耳をふさいだ

「ボリューム下げてからじゃないといつなるんだよ」

「先に言つてよ~」

「クウ、卑怯だぞ!」

「正当防衛だ」

そんなこんなで唯もギターを買いやつとこれから桜高軽音部が始動
する

第二話（後書き）

アニメ第一話です

いろいろひつ 飛んだ設定になつておつります
ご了承を

唯がギターを始めてしばらくが過ぎた…

「クーくん、ここが分かんないんだけど」

澪から渡された『サルでも分かるギター』という本を貰い、唯はその本を見ながら分からぬところは俺に聞きながら熱心にコードの練習に励んでいた

「ギターの弦って怖いよね、細くて硬いから手が切れちゃいそう

「やうだな。手の皮が柔らかこうちは手が血まみれになつてもおかしくは無いが「キヤ————!」」

「澪ちゃん、どうしたの？」

唯が隣っこで小さくなっている漆に問い合わせた

「痛い話は駄目なんだあ」

「匂ふ耳を慕ひて闇」見えないそふりをみせる

「澪らしいな……」

そんな邊に誰かアーティストがいて、手を差し出した

「大丈夫だよ、澪ちゃん。本当に血が出てるわけじゃないから」

それを確認した澪は立ち上がり咳払いをした

「まあ、やつてゐるうちに皮膚が硬くなつてくるから大丈夫だよ」

「ま、澪は唯に右手を差し出すと唯は見当違いの事を言つ出した

「本當だーふにふにー」

澪の右手を^{ふに}ふに押してこくと遂に澪のまつが恥ずかしくなつて
あたよつて俺に田線だけで助けを求めてきた

「唯、練習再開するわ」

唯の首を掴んであるまつを引つ張つていく

「はあ……」

澪は助かつたようなため息をついていた。しばらく練習していくと
お開きの時間になつてきたのでギターを片付け帰路についた

「せつこやもうすぐテストだな」

「やつだな」

「…………」

俺の言葉に頷く澪と無言で汗を流す律

「澪は大丈夫そうだな」

「あたしはあ……」

律が声をあげ抗議する

「俺の目を見て大丈夫って言えるか?」

「うう……」めんなさい…みーおー

ついに澪に泣き付いてしまった

「毎回だな」

「うむせークウー・中学から50位しか取れないのこー。」

「じゃ勝負してみるか?そつちは澪に教えてもらひえよ」

「空也、大丈夫なのか?」

澪は心配そうに俺を見るが俺は黙つて親指を立てた

「律に負ける気がしねえ」

「そこまで言つならやつてやるー」

律が俺に向かつて拳を突き出した

「俺が買つたらハンバーガーのセットを奢れ、お前が買つたらハンバーガーのセットを奢る」

「いいぜ。」さすがに澪がついてんだ!」

「澪が証人だ。踏み倒しはきかねえからな」

そんなこんなでテストの点数を競うことになった俺たちはテスト期間に突入する

「負ける気がしねー」

それから数日、テストが帰ってきた

「ん~！テスト終わつたあ！」

「高校に入つて急に難しくなつたから大変だつたわ」

「そうだな、そしてもつと大変そうな奴がここに」

唯が力のない笑いで答えていた

「クラスでただ一人追試だそうです」

暗い顔で12点の答案を見せた

「うわあ…」

「大丈夫よ唯ちゃん、今回の勉強の仕方が悪かつただけだつて

「そりだよ。追試なんて余裕余裕！」

紬と律が励ましていたが数秒後に過ちだつたと気づかされる

「まあ、勉強はやつてなかつたんだけど…」

「あたしの励ましの言葉を返せー。」

律が怒鳴つた

ねえりこちゃんは何だったの?」「

唯かし一つもの指定席で律に聞いた

今回のあたしは元気でたのたよ見よ！」

テクトの答はは89点と書かれていた。

この本がおもしろい。

卷之三

卷之三

二人から渡された答案を見ると律が絶句していたが俺を視界に入れるとニヤリと笑った

「さーて問題のクウは何点だつたんだ?」

1

あ
い
た
！

ピッヒテストの答案を紙飛行機にして律の「△」に当たた

「おへしゃー負け惜しみしゃがつて…」

ガサガサと紙飛行機を戻していくと律の汗の量が多くなった

「澪に教えてもらひてそれではまだまだだな」

「空には何点だつたんだ?」

澪が覗き込むと澪も驚愕していた

「あ…満点…」

「澪も袖もをして変わんねえだろ」

「やつだけど…」

律はずいと固まつていた

「これが実力だ」

ポンと律の肩を叩いた

「ひへしゃー…」

律は叫びながら準備室から出て行つた

「でも中学のときせあんまり取つてなかつたのに一体どうしたんだ?」

「?」

その質問に答えたのは俺じゃなく紺だった

「でも天城グループの御曹司ですから、これくらいことは普通じゃない？」

それを聞いて澪が頷いた

「そういえばそうだったな

「中学のときはそんなことバレて無かったから、50点くらいで抑えてたんだよ。んなことより唯の追試を考えねえと」

すっかり忘れられた唯も「一度焦点を当てた

「確かに追試の生徒は合格点取れるまで部活でれねえからな

「やうなのー？」

「詳しことは明日告知されんだる。今ロベーリはみつけり教えて

「そつ言つて俺は長椅子から立ち上がりお開きになるまで唯にギターを教えていた

「やうめ

翌日…

「クーくんの言つとおつでした、一週間後の追試まで部活に出ひも駄目なんだって」

「言わさん」ひも駄目にな、しっかり勉強して来い。ま、今日のお菓子

「子ぐらじは食つてけ

今日のお茶菓子である羊羹を指差した

「つさー。」

「——しながら羊羹をたべる唯の前に俺の分の羊羹を差し出した

「やる

「ありがとー！クーくん！

俺は長椅子に座りヘッドフォンをあてギターを持った

「空也何じてるんだ？」

「ん？ああ、ちょっとな

曖昧な返事で澪は頭にマークを浮かベティータイムに戻つていった

今俺は夏休みに向け作曲中である。気が早いような気もするが現時点では唯が追試で練習できないし、夏休み中に練習できれば桜高祭で演奏できる。それをするためにも今からでも開始しないと間に合わないかもしれない、なんせ現時点で音あわせ自体出来てないのでから俺は鞄からルーズリーフを出し思考を巡らせる。しばらく考えていくと紬が田の前にいた

「お茶はいかが？」

俺に紅茶を差し出してきた

「ああ、サンキュー」

素直に受け取り、一口飲む

「ん、うまい」

「よかつた」

感想を聞くと笑顔を見せ自分の席へ戻つていった

一息ついた後に作曲を再開するがお開きまでまるではかどらなかつた
翌日以降、唯は部活に顔を見せなくなつた残りの三人は唯の心配を、
俺は作曲に専念していた

そして田は過ぎ追試前田…

「澪ちやん。勉強教えて~」

唯が澪に泣きついてきた。どうやら勉強できなかつたようだ

ダダダダダッパン！

「空也、勉強教えてくれ~」

大地が準備室に駆け込んできた

「うちのクラスの追試つてお前だつたか

「頼むよ～。空也しか頼れないんだよ～」

「わかったわかった。部活上がりにお前んち行つてやるから、家で待つてろ」

そういうと大地は頷いて準備室から出て行つた

「やれやれ…澪は唯を教えるんだろ」

「ああ、このままだと唯が退部にならうだからな。唯の家でみつちり教える」

「澪ひや～ん…」

唯が抱きついて感謝を表していた

「なら今日もさうしてやれ。少しでも時間が長いほうがいいだろ」

「空也まだするんだ？」

「俺はあの馬鹿を教える。まあ、アイツが退学にならうと知ったことは無いが」

そつこつている間にも俺はギターをケースにしまい立ち上がつた

「じゃあな。唯しっかり勉強しろよ？俺達と軽音部続けたいならな

それだけ言つて準備室を出てドアを閉める瞬間に

「また明日なー空也ー！」

澪が笑顔で言つていたので澪に分かるように右手を上げて応えた

「行きたくはねえがな」

階段を下りながら、鞄からヘッドフォンとルーズリーフを取り出した、ヘッドフォンからは出来かけの曲をルーズリーフからその譜面を出し考えながら大地の家にむかった

大地宅…

「あら空也くんいらっしゃい」

「どーも。大地は？」

部屋に居るわよと家に招き入れられ、大地の部屋に入る

「空也ー待つてたぞー」

あらうことがゲームをしてやがった

ブチッ

無言でコードを引っこ抜く

「ああつーなにじやがるー」

「それはいつの台詞だ。わざわざお前如きの馬鹿のために来てやつたんだ。勉強しやがれ」

「お前言葉に棘しかねえ…」

大地はしづしづ勉強をはじめた。そして俺はコードを繋ぎゲームをはじめた

「教えてくんねえの？」

「質問は五分に一回受け付ける。自分の分かる範囲でやつてみる」

大地は素直に従つた。このペースで勉強を教えていき七時頃にはある程度まで問題を解けるようになった

「こなだけできつやあ充分だ。あとは明日結果を出すだけだ」

「くわやー！」

大地が俺に飛びついてこよどしたが避けた

「男に、ひともあらうかお前に抱かれて喜ぶ趣味はねえ。俺は帰るぞ」

そう言って大地の家からるとケータイが震えた

「ん？」

ケータイのディスプレイには律と書かれていた

「なんだよ」

「クウモ」「ひうね」など?

「は？」

「だから唯の家にだよ」

「何で俺が、唯を教えるのには澪がいるだろ？」

「いいからーいつも唯と別れるといひで待つてるからな」

それだけ言って律は電話を切ってしまった

「仕方ねえ、いくか……」

しばらく歩いていると律を見つけた

「遅いぞー！クウー！」

「やつや悪かった。さつとと行くぞー」

俺は唯の家に向かって歩き出した。律は俺の横に並んで歩き出した
たて止めた。

「最近や、お前何してるんだ？」

「人に物を聞くには説明不足だな」

唯の家に行く途中で律が聞いてきた

「部活でだよ。澪やムギが聞いても曖昧な事しか言わないじゃん」

「今の段階ではまだ話せないな」

俺の言葉に律は不満げな顔をしたがすぐ笑顔になつた

「音楽だけは眞面目だからな。話せる時になつたらちやんと話してくれよな」

見透かされたような気はしたが素直に頷いた

「こいだこい」

雑談を繰り返していくと唯の家に着いたよつて律はインターホンを押していた

「律さんおかえりなさい」

唯に似た少女が出迎えてくれた

「誰?」

「妹の平沢憂です。よろしくお願ひします空也さん」

少女と俺の目が合つと少女は礼儀正しく自己紹介してくれた

「じー寧にじーも。天城空也だ、よろしくな」

「お姉ちやんからよく話は聞いてます。ギターを教えてもらつてるつて」

平沢妹からスリッパを出され俺たちは唯の部屋に向かつた

「皆一クウが来たぞー」

律が先頭に次に平沢妹、最後に俺の順番で中に入つていった

「和?」

そこには軽音部のみならず和がいた

「こんばんは、空也」

適当な所に腰を下ろすと平沢妹がお茶を差し出した

「空也さん、お茶どうぞ」

「ああ、サンキュ。しかし出来た妹だな」

「でしょークーくん! 豊~クーくんに褒められた~」

唯が平沢妹にくつつく

「別に唯を褒めてるわけじゃないんだが」

この言葉に平沢妹が反応した

「お姉ちゃん男に人に呼び捨てにされてるんだ。凄ーい! いいな~」

今度は平沢妹が姉を称えた

「私も名前で呼んでもらっていいですか?」

田をキラキラさせて平沢妹が迫ってきた

「じゃあ憂ちゃんでいいか?」

はい、と満面の笑みで返され律が眩しがつていた

「で?俺をここに呼んだ理由は?」

「特に無いぞ」

澪が予想外のことと言い出した

「帰つていいか?」

「それは駄目だよクーくん」

「駄目です」

唯と紬が拒否した

「大変ね、空也も」

「和だけだな分かつてくれるのは。」

それからしばらくなでで雑談し不意に俺と和の口が揃つた

「「そんなことより勉強は?」」

俺と和以外の全員が黙ってしまった

「澪…忘れてたな？」

「うーー。」

澪は慌てていた

「はあ… セツセツと教える下で待つてやるから」

セツセツと立ち上がった

「あ…ああー。」

澪は笑顔で返事したのを見ると軽く俺も笑った

「憂ちゃんもここいつ、お姉ちゃんの邪魔になるからな

「はーー。」

「じゃあ私も帰るわね」

和も立ち上がり帰る支度をしていった

「また明日な和」

「ええ、空せてもおやすみなわー。またね憂」

玄関で和を見送りリビングに向かう

「空せー、お茶いかがですか」

「あつがと、いただくよ」

憂ちゃんとしばりく雑談していると律が下りてきた

「憂ちゃんなんかゲームしない?」

「ひから居心地が悪くて降りてきたよ」

「いいですよ」

憂ちゃんがそつこつと一人はゲームをやりだした俺はギターを弾くのはさすがに迷惑なので文庫本を読んだしばりくと漆と紺が下りてお開きになった

「遅くまで悪かつたな」

「いえ、皆さんまた来てくださいね」

漆と憂ちゃんのやり取りを横田に全員が出て最後に俺が出てよひとすると

「[空せ]さん、連絡先交換してくださー」

とケータイを差し出してきた。漆たちに先に行つてくれと図して俺のケータイを出して連絡先を交換した

「またな。憂ちゃん」

挨拶を済ませ家を出て漆たちに追いついたそれから紺と別れ、いつどおりの通学路を三人で歩く、夜も遅いので一人を家まで送る

「姉ちゃん、遅かつたね」

と律の家の前まで来ると一人の男の子がいた

「澪たちと遊んできたんだ~」

男の子がこっちを見ると笑顔にしてこっちに向かってきた

「兄ちゃん~また一緒にゲームやね~」俺強くなつたよ~。」

意気揚々と言つた感じで俺に向つてきた

「また今度な。聰

聰といつ少年は律の弟でなぜか俺のことを兄ちゃんと呼んで慕われてゐる

「じゃあ、また明日な律

「澪もな。クウ~夜が遅いからつて澪を襲うなよ~。」

「つ~律~~~~~」

澪が顔を真つ赤にして抗議していた

「近所迷惑だ。じゃあな律、聰も

澪の頭を軽く叩き律と聰に挨拶し歩き出した

「姉ちゃん、やつぱりあの一人仲好いね」

「そうだな、澪が男子でただ一人ありのままの自分で居れるのがク
ウだからな」

「この姉弟がそんなことを言っていたなんて知る由も無かつた

「ありがとな空也」

「ん?」

「唯の家に来てくれて、今まこいつを送つてしまつてるし」

澪が不意にそんなことを言に出した

「別に礼を言われるような」とはしてねえよ。俺がそりやつたいか
らやつてるだけだ」

「それでもありがと」

「ああ……」

街灯に照らされ満面の笑みを浮かべる澪を直視できなかつた

田を置けそう口にしたが氣が氣じや無かつた

翌日の追試で唯は見事に満点をとり追試をクリアした後不本意ながら大地もギリギリでクリアした

「さて、勉強中もコードの練習に励んだと言つ話だから。軽く弾い

てからおつか

「どんとこだよクーくん。XでもYでも」

X?Y?俺と澪は顔を見合わせた

「じゅあ…」

と澪は「一ノ瀬の名前をいつてこべが誰の手が止まつていた

「わすれちゃつた…」

「ここはいきなことを聞こ出しちつた

「また一からかよ」

「じゅあ空せ後ろよひじへ」

「待てー、お前も付きて」

澪の首元を掴み強制運行したのはいつまでも無い

第四話（後書き）

アニメ第三話です

結構話を膨らませてみました

夏休み直前のある日……

「ん? なんだこれ?」

「どうしたんだ? 空也……」

澪と二人音楽準備室にいた時に見つけた段ボール箱その中身は昔の軽音部の物だった、その中に一つの桜高祭と書かれたテープがあった

「空也、このテープ再生できるか?」

「ちょっと待つてる

そういうつて俺は鞄の中から小さなラジカセを取り出し、テープを入れ再生ボタンを押した

～～～

「上手いな

「私たちも……」

この時澪の中に何かが湧き上がっているのを確認できた。まあ負けず嫌いだしな、対抗意識しかないだろ

その日の放課後……

「合宿をします……」

澪がビシッと指をさして決めポーズをとった

「合宿?」

唯が首を傾げた

「もうすぐ夏休みなんだし

「もしかして海?それとも山?」

律が的外れのことを口こした

「遊びに行くんじゃねえよ。朝から晩までみっちり練習…だろ?」

澪は頷いたがすでに一人は聞いてすらこなかった

「うわあーなに着ていい?」

「水着も持つていかなきゃな

「聞け——————」

案の定澪は怒鳴ったとおりあえず全員を指定席に座らせ俺は長椅子に座る

「夏休みが終わったら、もうすぐ学園祭ですよー。」

「学園祭……」

「そり桜高祭の軽音部のライブは結構有名だったんだぞ……」

澪の言葉が尻すぼみになつていいくのに対し律と唯は田をキラキラさせていった

「はいはーい！ 私メイド喫茶がやりたーいーー！」

「え、お化け屋敷がいいよ！」

律と唯はまた違う方向へ脱線して語つた

考へても見る筆遷可メ立派を着せておめ」

その言葉を聞いて俺の中で遅にメイド服を着せてみる……って俺まで脱線してどうすんだ

「ライブやるんだろ?」

いらん想像をしていた律は澪の拳骨をぐらり怒られていたその時に紬が遅れてやってきた

「アーマーが走り出しへこへりあひへつせうてこひとおもひたひたひ二三

確かに入部して三ヶ月になるがまだ一度も全員で音合わせをしていない、澪や紬とは何回かあるが…

「でも… 楽しそうですね。皆でお泊りするの夢だったのー。」

なんとも小さい夢だな

「じゃあさー海がいい? 山がいい?」

律はまだ遊びに行く気満々だった

「遊びに行くんじゃないってのー」

「でもさ、こへり立するんだろ」

唯が核心をついた

「せつだぞ、スタジオ代も」「めのとこへり立すると思つてんだよ」

「そ……それは……」

その部分を突かれるとなすがに澪は黙つてしまつたがなんとか打開策を思いついたようだった

「ムギキ……別荘とか……」

「ありますよ」

「…………あんのかい! ……」「

紬の隠す事のない告知に紬と俺を除く二人がツツッこんだ

紬の鶴の一言で軽音部の会場はほとんど拍子で決まったそしてその

日の夜…

「親父」

「ん?」

「夏休みに入つたら軽音部の合宿に行くから」

「さうか、どこに行くんだ?」

「琴吹財閥の別荘」

「おーそうか! 琴吹さんとこか! ハツハツハ! 楽しんで来い」

親父は高笑いをして自室に消えていった。そして合宿当日

「ギターは一つとも持つていくか?」

右肩にエレキを左腕にアコギを右腕にキャリーバックを持ち集合場所に向かつた

集合場所に到着すると唯を除く全員が集まっていた

「おはよつ。空也、なんでギターケース一つなんだ?」

「エレキとアコギだ」

「一つも持つてたんだ」

「合宿なら使うかもしけねえしな」

しばらく雑談し集合時間が過ぎたが唯の姿がなくケータイも通じない

かつた

「寝てるな」

俺はケータイを取り出しうまかんに電話をかけた

「もしもし」

「うまいことおはよー。お姉ちゃん起きてるかな?」

「今日から合宿でしたよね。すぐお姉ちゃん起きりますー。」

憂ちゃんが慌てて階段を駆け上がり唯の部屋に入り唯を起こして、電話は繋がっていたので唯に代わってもういた

「もしもし……おはよー」

「オハヨウガイヤマス……」めんなさいー。

「ギコギリ聞いたねえ」

ケータイから唯の謝罪の言葉を聞き流して集合場所にやつてきた

「全べ、空也が憂ちゃんの電話番号じりなかつたひじつなつてたことか」

唯が安堵の表情で凌が呆れた表情をしていた

「でもクウ、よへ憂ちゃんの番号じつしたな」

「前に唯の家に言つた時に交換したんだよ」

通路を挟んで反対側に座っていた俺はそつ答えた。なぜか澪が複雑な表情をしていたが見なかつたことにしよう

しばらく電車に揺られ海が見えて律と唯がはしゃぎ別荘についた

「「めんなさい。一番小さい」ところしか備りれなかつたの」

と紺は謝つていたが澪、律、唯には充分大きいといった感じだった

「ま、高校生にはこんなもんだろ」

「「えー」「」

俺の言葉に二人は驚いていた

「もしかして空也の家つて……」

「超金持ち?」

澪と律が紺に聞いていた

「はいー!」

「「……」「」

紺の即答に二人は黙つてしまつたそれから別荘の中を見て周り、冷蔵庫を開けると高級な牛肉が入つていたそこに「空也へ」と書かれたメッセージカードが入つていた

「なんだ？」

「俺からのプレゼントだ！…父

「あのくそ親父…」

裏から手を回してやがつた…

「悪いな、紺。うちのくそ親父のおかげでいつも普通ではなやうだ」

「いえいえ。天城グループのお気遣い感謝します」

二人が礼儀正しくお辞儀した

「なんか世界がちがうなー」

律が遠い目をしていた

「ムギ、スタジオはどこなんだ？」

「上うちです」

紺の案内に俺と澪はついていった。律と唯がついてこなかつたが、どうせ水着に着替えているのだろう田の前海だしな

「しばらへ使ってないけど」

前置きをして紺がスタジオのドアを開けた

「空也」

「ああ」

ギターを取り出しアンプに繋ぐ

ジャーン

「問題ないな…」

そのまま題名のない曲が作った曲を弾く

「空き地をどうお使いですね？」

空也が厭てくれるといを引張て貰えるから助かるな

その言葉を聽れ——一連の弾劾終れる

バチバチバチ

「さすがくに、遊ふぞー!!」「せー!!」

澪の言葉を遮り律と唯が水着で入ってきた

「ハ、なる」とは分かってたけどな

「そうだ世一ケウ！田の前に海があるんだから泳がないと損だ世一！」

「練習しに来たんだろ！！」

俺、律、澪の順番で喋ると紺も遊びたそつな田をしていた

「ムギー！ 行くぞー！」

「待つてるから… まよつと待つて～」

律、唯、紺は行つてしまつたふと横を見ると海に田が行つている澪がいた

「澪も行つてこよ」

「だつてこには練習に来てるんだし…」

「その気持ちはわかるが、なかなかこんなプライベートビーチみたいな所には来れねえから今のうちに存分に遊ばねえとな」

澪の背中を押し手助けする

「なら空やも来てくれ」

「ああ。わかつた」

笑顔で答え澪は着替えにいった

「さて…」

誰もいないこの時に新曲を軽く弾いておくか…

ああ、王様の声に逆らつてばれりやつた夜君は笑っていた

ああ、オーロラに触れる丘の上両手を伸ばして僕を誘っていた
はじけて、バラバラになつたビーズ綺麗だねつて夜空にプレゼン
ト

君の夢が叶うのは誰かのおかげじゃないぜ風の強い日を選んで走
つてきた

今頃どいでじでじでじでじでじでじでじでじでじでじでじでじで
君の夢が叶うのは誰かのおかげじゃないぜ風の強い日を選んで走
つてきた

飛べなくとも不安じやない地面は続いてるんだ好きな場所へ行こ
う君ならそれができる

フルコーラスではないが悪くないな…まあ澪たちが待つてたから着
替えるか…

「やつときたぜーおーいクゥーー

水着に着替え浜辺に出ると海で律と唯が手を振つていた

「はーはー

軽く手を振りパラソルの下で腰を下ろす

「遅かつたな。何してたんだ?」

澪が隣に腰を下ろした

「ん?新曲のチェックしてたんだよ、ほら唯が追試で来れない頃か
らやつてたやつだよ

「あれって曲を作ったのか？！」

「ああな。今やつてゐる一曲だけでは物足りないしな、後で譜面渡すよ」

「ああ、楽しみにしてる」

澪は嬉しそうに走ってこつた

「澪ちゃん嬉しそうでしたね」

「やうだな。あいつは何事にも真面目すぎるへりこだからな」

紬が反対側に座つた

「それは空也君もでしょ？」

「こと音楽に対してだけな。澪とは普段の部活から会わせてやつてから、澪の考えることは大体分かる」

「クスシ 本当にそれだけ？」

紬が覗き込んできた

「むむむ」

田を会わせるのが嫌で田を逸らした

「私ね、空也君みたいな生活が送りたかったの」

「え？」

「私の家は空也君も知つてるとおりだからなかなか普通の生活がで
きなかつたの」

「だから皆でお泊りするのが夢だつて言つてたのか

紬は頷いた

「小さい頃私と同じ様な家の子が普通の家に暮らしてゐて聞いて
羨ましかつた」

「それつて俺か？」

「うそ、お父さんの話で聞いただけだつたけど本当に羨ましかつた。
だから…今こいつやつて皆で遊んで皆で『』飯を食べる。それだけです
つ『』く樂しへの…」

それを言ひ紬の顔はとてもすがすがしい顔をしていた

「なら…もつと樂しまなきやな」

俺は立ち上がりて紬に手を差し出した

「うそ…」

俺の手をとり立ち上がつた紬は元氣よく遊びに行つた、軽音部の女
子四人が一緒に遊んでいるのを確認すると俺は別荘に戻つた

手早く着替えを済ませ、時間を見ると夕食の準備をする時間だつた。

親父のあまり嬉しくないプレゼントの肉の塊を取り出し一人分にカットしていく。カットが終わると米を洗い炊飯器にセットする。ご飯を炊いている間に付け合せのサラダやスープを作っていくベランダから海を見れば四人の姿が見えなかつたのでカットした肉を焼く準備に取り掛かる。

「こんなとこにいた！」

澪を先頭に四人がリビングに入ってきた

「もうちょっと待つてろ。後は肉焼くだけだから

「これ空也君が作ったの？」

「ああ、そうだけど？」

「これ凄くおいしい……」

紺がスープの味見をしていた

「あの肉の塊が綺麗にカットされてるぜ

律が肉のチェックをしていた

「ちゃんとご飯も炊けてる！」

唯が炊飯器を開けていた

「澪ちょっとご飯入れてくれ。肉を焼いてしまうから

厚切りにしたステーキを五枚暖めてある鉄板に乗せ上からブラックペッパーとニンニクをかけ両面を軽く焼けたらカットし別で暖めてあつた一人用の鉄板に乗せる

「ほいできた！」

一気に五枚分焼き全員そろって食べる

「つまーい！」

「美味しいね！りつちゃん

律と唯は「」飯をお代わりして夕飯を食べる

「スープも具にじっかり味が浸みてる…」

「お肉が絶妙な焼き加減で舌の上で溶ける…」

澪と唯一舌が肥えてそうな紬からも大絶賛だった

「ふう～食つた食つた」

「おいしかったね～クーくんの「」飯

「口に合つて何よりだ」

キッチンで洗い物をしながら答えた

「空也、洗い物くらい任せてくれてもいいのに」

「じゃあ洗った食器拭いて片付けてくれるか？」

「わかった

テキパキと動く澪を横田に俺は食器を洗つていへ。紺が問題発言するまでは…

「まるで新婚さんみたいね」

途端に澪の手から皿が落ちていく

「あぶねえ！」

とつねに皿をキャッチする

「ななな何言つて…」

澪の動きがギクシャクしだして一気に危なつかしくなつていく

「澪

「ななな何だく、空也…」

顔を真っ赤にさせた澪が振り向いた

「もういいよ。ありがとな」

澪の手から皿を預かる

「先にスタジオで練習してくれ。これが終わったらすぐ向かう

から

澪はギクシャクしながら頷きスタジオに歩いていった

「ほら、お前らも先に行つてろ」

「はーい…」

「ちえ…今日はもう疲れたよ」

「先に行つてますね空也君」

三者三様の答えが返つてきてスタジオに歩いていったそれを確認すると俺は黙々と家事を終わらした

スタジオにつくと律と唯が床に寝そべつていた

「遊びすぎだな」

「空也もムギもちょっと耳を塞いでてくれ」

澪がベースアンプを一人の頭元に置くとボリュームを最大にした。俺はヘッドフォンを紺に着けさせ電源を入れ、俺は耳栓を着けた。途端に耳栓を着けてても分かるぐらいの振動を感じ、二人が飛び起きた

「起きたか…ほれ」

起きたのを確認すると、全員に新曲の譜面を渡した。歌詞はまだフルコーラスができるないので書いてないが

「綿みたいにパツとできたわけじゃないが、あの曲といつれの一曲や
るぜ」

マスター テープが無いので全員の目の前で演奏する

「どうだらうか?」

曲が終わると意見を求めた

「私は良いと思つ

「カツケーーー!」

「カツコいいね~」

「私も好きです」

高評価を受け俺は胸を撫で下ろした

「よーしゃらうぜーー!」

完全に目が覚めた律を中心にまだタイトルの無い曲の通し、新曲『
Funny Bunny』の個人練習に励んだ

「疲れた…」

律がステイックをドラムに置き床に伏した。時計を見ると結構長い
間練習したので流石に俺も軽く疲れていた

「少し休憩するか…」

俺もギターを専用のスタンドにおいて軽くストレッチした

「外に涼みに行こうぜ～」

律と紬、そしてなぜかギターを持って出て行く唯

「ひとまず俺らも行くか」

「そうだな」

二人でスタジオを出た

「そういうやスイカがあつたけど食うか？」

「ああ、頼む」

それを聞くと俺はキッチンに入つて冷水で冷やしたスイカを水から取り出し五等分して皿に乗せて御盆にのせ塩を取つて外に持つていく

「ほれ」

御盆に乗せたスイカをテーブルに置いて一つを澪に渡す

澪が受け取ったのを確認すると俺も一つひとつ澪の隣に座る
「何やつてんだ？」

「ありがと」

「ああ？ それやつたら練習に戻るからなーー！」

「分かってーー、ムギーそっちいいか？」

「うんーー」

「せーのーー」

律の合図と同時に紺が点火し唯の後ろから噴出花火が上がった

「最後の曲ーー、いっくぜーーー！」

ライブの真似事なのがそのまま景は充分感動的なものを感じ取った

「空也、そここのラジカセ取つてくれないか

澪は今聞かせるのが一番だと判断したようだ

「ああ……」

ラジカセを澪に渡す

「田指せ武道館ーー！」

律が拳を突き上げたの同時に澪が再生を押した

「武道館田指すなら」これがいい出来る様にならないとな

「上手いもんだな」

じぱりく聞いていたとどんでもない声が聞こえた

『お前が来るのを待っていたあー…ギャー…』

ヘビメタの音楽だった

「ん？」

俺の腰中に凌が張り付いていた

「聞こえない聞こえない聞こえない…」

聞こえないと連呼していたそれを見た律は悪い顔をして凌に近づいていった

「膝の皿屋敷…」

「キヤー…」

「膝の皿屋敷…」

「こやー…」

遂には俺に抱き着いて泣いてしまった

「律…悪ふやけしますわ」

軽く律を睨む

「澪のあの顔を真正面から見たからな、あの破壊力はすさまじいぞ。
お、スイカあるじゃん！唯食おうぜ！」

律が冷静に分析していたことすら知る由も無かつた

しばらくすると澪たちが戻ってきたが澪はまだ拗ねていた

「澪、悪かったって」

「つーん…」

そんなに可愛く拗ねないでください、俺が持たん…

「ねえクーくん」

「ん？」

「さっきのカセットのギターってそんなに難しいの？」

「もしかして弾けるのか？」

「うんー…みてーーー！」

「どおーー？」

「ちゅうと待て…綿

「はーー？」

俺の畠の前でちゅうとのワジカセの音と同じ音を鳴らす唯がいた

「さよのと適当にキーボードを弾いてくれないか？」で唯は聞いた音をギターで鳴らせ

「「わかつた」」

まず紬が適当にキーボードを弾き、終わつた後で唯が俺が聞く限り完璧な音で弾いていく

「どうだ？」

紬は頷くだけだった

「絶対音感か……」

馬鹿と天才は紙一重といつがまさかここまでとはな

「絶対音感？」

唯が首をかしげた

「いや、わかんねえならいい。練習しようつか……」

それからじばじばへ練習しあ開きになつた

「ふう……」

俺は今大浴場に浸かっている。女子たちは外付けの露天風呂に入っている

「今日は長い一日だった…」

本当に長かった…おかげでいろいろな事を知った充分収穫はあった
律も唯も明日は練習してくれるだらうそして…いま何故か澪の上目
遣いのあの顔が出てきた

バシャ！

「いらっしゃる前にさつわと出よつ」

わつぱりとした気持ちでキッチンに向かうと誰だかわからない少女
がいた

「誰？」

「あたしだよー。」

そうついつて前髪をあげる

「なんだ律か」

「なんだたあなんだークウはぜんぜん変わんねえな

「それが俺の売りだ」

コップに牛乳を注ぎ一気に飲み干す

「今日は疲れた…俺は寝るぞ」

「澪なら外で涼んでるぞ」

俺は右手だけ上げて応えたバルコニーに出ると律の言ったとおり澪がいた

「寝ないのか?」

「あ、空也……ちよつと涼んでるだけだ」

「やうか……」

澪のとなりで手すりに背中を預ける

「空也は、合宿に来て良かつたか?」

澪が景色を見ながら俺に聞いてきた

「なんだ? いきなり……」

「いや、思つただけだ」

俺は立ち上がり、澪と同じように景色を眺める

「一言で言つなら良かつた。まだ練習不足とかそういう要素はあるがバンドをやるに欠かせないチームワークがより一層高まつたとは思つ」

「ああ……私も空也の知らなかつた所も知つたし唯やムギの事もな

「他者の全部を知らないてもいい。ただ一つでいいんだ」

「え？」

澪が俺の顔を見た

「ただ一つそういう心の底にある想い、それを知ればいい。唯みた
いに天真爛漫な生き方が全員できるわけじゃない、どんな形であれ
そいつの心の底にある想いは表現しているそれを汲み取つてやる事
だ」

「……」

澪は黙つて聞いていた視線を俺から離さずに

「やつぱり君は優しいな

そうこうして澪は笑つた

「ガラじやねえな。じゃあ俺は寝るから」

澪の頭を撫でバルコニーから戻ると

「おやすみ、空也」

俺は右手を上げ応え、自分に当たられた部屋に戻つた

翌日、日中は海で遊び、夕方から練習と云つて二日程になつた二日目の
午後の電車で帰るので二日目の午前中も練習になつたみつちり練習
し家に帰る頃にはへトへトになつっていた

数日後律が澪に見せてはいけない写真を見せて意識を落とされてい

たのは知つた事ではない

第五話（後書き）

アニメ第四話です

途中で出てきた曲は実際にある曲でいい曲なので興味がある方は検索してみてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8594z/>

けいおん! 僕の奏でる音

2011年12月28日22時51分発行